

講義名	生涯発達論			
担当教員	吉村 典子			
開講期・曜日・時限	後期集中 その他 その他	授業形態	講義	
履修開始年次	2年生	単位数	2	備考
主題と概要				
人は生涯を通じて発達し続ける存在である。幼児期から形成され始める自己概念や他者との関係も、加齢と共に発達し、また変容していく。この過程をErikson, E.H. は8つの人生周期にわけ、各段階に発達課題と発達の危機の概念を提唱した。人の発達過程について発達課題を中心に捉え、考察することを目的とする。また、各周期(発達段階)での不適応が、どのような問題を生じるのかにも焦点を当てる。				
到達目標				
人が一生を通して、社会との関わりの中で、どのように発達するのかを理解することができる。 特に自発達時期の特徴とエリクソンによる発達課題と心理社会的危機についての知識を得、理解することができる。 発達上の不適応とされる問題について理解することができる。				
提出課題				
毎回の講義後に、講義内容について簡単な質問を課す。また、内容についての意見や考察の記述を求められることがある。				
課題(レポートや小テスト等)に対するフィードバック				
前回の課題の解答を授業の初めに解説する。 2回の理解度チェックテストも採点後返却、解説するので、訂正し、再提出すること。				
評価の基準				
授業中の態度、毎回の課題点・・・50%程度 理解度テスト(1、2、3)・・・50%程度				
履修にあたっての注意・助言他				
基本的な受講マナーを守ること。 講義で取り上げる心理学的知見は限られているので、興味や疑問を持った内容は、自分で調べ、学習する姿勢を持ってほしい。そのための参考資料などは随時提示する。				

教科書					
.使用しない。					
プリント資料及び参考文献					
講義時にプリント資料を配布する。					
参考文献 生涯発達論(2000) 服部祥子 医学書院 問いからはじめる発達心理学(2014) 坂上裕子他 有斐閣					
授業計画					
1.-2. 生涯発達および発達課題とは何か 全体の講義概要の説明・なぜ生涯発達がとりあげられるのか・人生周期を10に分けた理由 発達の基本原理について					
3.-4. 乳児期の発達課題と危機・・・虐待の与える影響について					
5. 幼児期の発達課題と危機・・・自律性と自発性を育てる・親の役割と諸問題					
6. 理解度テスト(1)の返却と解説、復習					
7. 学童期の発達課題と危機・・・自尊心の発達					
8. 思春期 自己中心性と高潮					
9. 青年期 自己の構築と自我同一性の危機					
10. 成人前期の発達課題と危機・・・モラトリアム期の延長として					
理解度テスト(2)の実施					
11. 理解度テスト(2)の返却と解説、復習					
12. 成人中期 生産性と停滞性					
13. 成熟期の発達課題と危機・・・第2の人生にまつわる問題					
14. 老年期の発達課題と危機・・・発達の最終段階とは					
15. まとめおよび理解度チェックテスト(3)の実施					
授業形態(アクティブ・ラーニング)					
ア:PBL(課題解決型学習)	イ:反転授業(知識習得の要素を授業外に済ませ、知識確認等の要素を教室で行う授業形態)	ウ:ディスカッション、ディベート	エ:グループワーク	オ:プレゼンテーション	カ:実習、フィールドワーク
キ:その他(A-L型であるけども、以上の項目のいずれにも該当しない場合)					
準備学修(予習・復習等)の具体的な内容及びそれに必要な時間					
毎回の講義後に、講義内容について簡単な質問を課す。それに答えられない場合は、内容の基本的な部分を理解していないことになるので、その場合は内容について復習し、わからない箇所は質問するなどしてほしい。 講義では乳児期から老年期まで、人の一生を対象とする。次回の講義がどの時期を対象とするのかは講義内で指示するので、その年代の特徴や社会的な問題などについてあらかじめ調べることが予習となる。 (予習復習を合わせて1時間程度)					
卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目の関連					
目標 からの達成によって、社会の仕組みや働き、日常生活と文化、人々の心理など、現実社会の様々なテーマに取り組み、よりよい人間社会を創造することができるというDP(1)に貢献できる。 本科目は直接調査をするわけではないが、さまざまな発達の研究を学ぶことにより、実証的な調査研究の方法を知ることができ、DP(1)に貢献する。 目標 からの達成することによって、人間の精神機能と心理学の研究法に関する基礎的知識を有し、さまざまな場面に活用する人間の心理と行動を科学的に分析し予測することができるようになるため、DP(3)に貢献できる。 目標 からの達成、特に目標 を達成することで、援助場面で心理学を応用することができ、DP(3)に貢献できる。					
双方向授業の実施及びICTの活用に関する記述					
実務経験の有無及び活用					
備考					